

養殖カキの食害防止に関する研究

豊前海研究所

1. 背景、目的

豊前海区のカキ養殖は昭和58年に導入されて以来、急速に普及し、現在では「豊前海一粒かき」というブランド名で海区を支える冬季の主幹漁業に成長しています。

しかしながら、平成22年頃から豊前海南部海域で魚類によると思われるカキの食害が報告され、その被害は23年に深刻化し、さらに24年には豊前海全域に拡大しました。食害によるカキの付着数の著しい減少は、収穫量の減少に直結するため、早急な食害防止対策が求められました。

本研究では「豊前海一粒かき」の安定生産を目的として、豊前海区におけるカキの食害の実態を解明するとともに、その効果的な防止技術の開発に取り組みました。

2. 成果の概要

(1) 食害実態調査

カキの養殖イカダにおいて、水中のビデオ撮影を行ったところ、稚ガキをついばむクロダイの様子がみられ、その胃内容物に多くの稚ガキが確認されたことから、クロダイが食害の原因種と特定することができました。(図1)

カキの大きさが50mmを超える7月以降に食害がみられなくなることから、この期間の食害対策が重要であることが分かりました。

(2) 食害対策試験

クロダイによる食害を防止するには、その捕獲やイカダへの侵入防止なども考えられますが、漁業者の負担を軽減するため、経費や労力のかからない手法を開発することが重要です。そこで研究所では、稚ガキのついたコレクターを連ねた垂下連をひとつかたまりにする「束ね垂下方式」を考案し、(図2)試験を行ったところ通常の垂下方式に比べ高い食害防止効果が認められました。(図3)

3. 今後の展開

「束ね垂下方式」は、手間のかからない実用的な食害対策として、既に中南部漁場や南部漁場等に普及し、カキ養殖の生産回復に大きく貢献しています。

今後もカキの生育状況や食害状況等を定期的に調査し、カキが食害を受けなくなる束ね垂下を解く時期などの漁業者への情報提供や養殖指導等を行ってまいります。



図1 クロダイによる食害（右写真：食害を受けた稚ガキ）

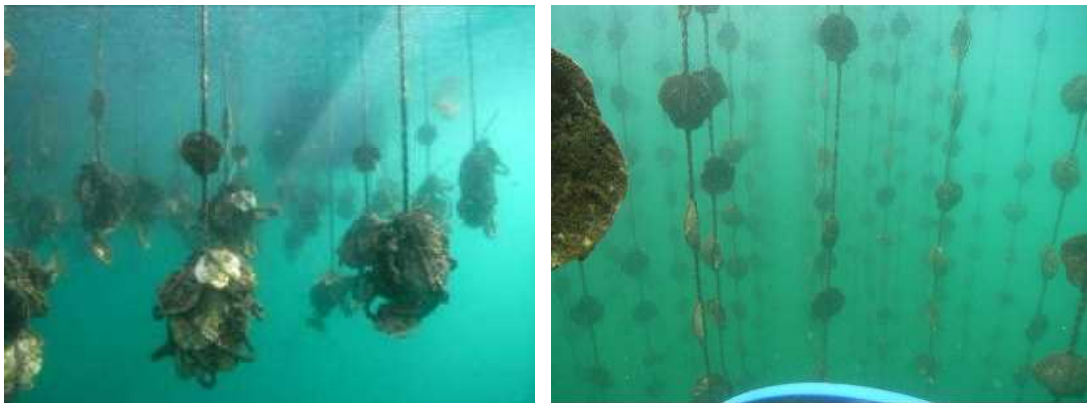


図2 束ね垂下方式（右写真：通常の垂下方式）

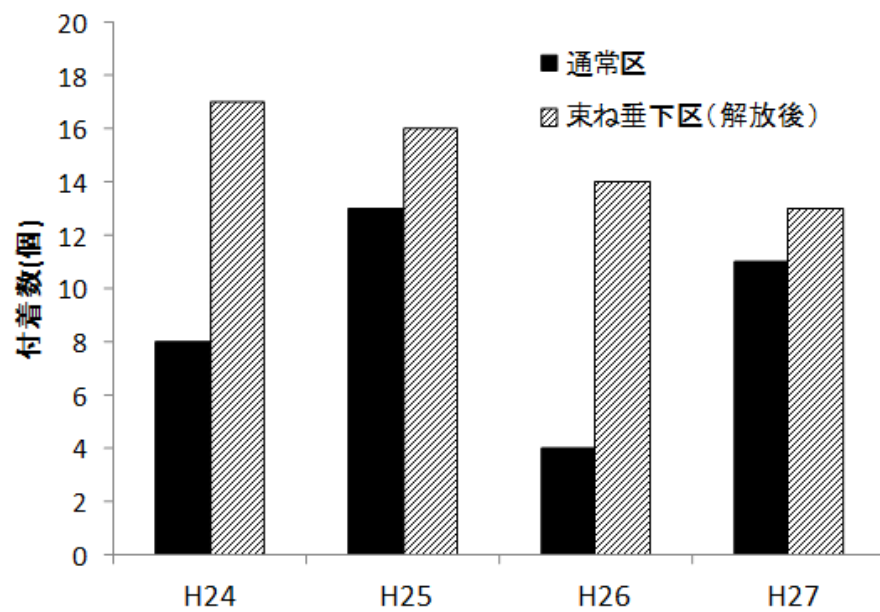


図3 束ね垂下解放後、コレクター（ホタテ盤）一枚あたりのカキ付着数